

たのであった。

そこで我々は、以上の観点をふまえ、新しい中国史を模索する基礎作業として三つの報告を用意し、シンポジウムを企画した。

北魏の部族支配と領民酋長制

勝畑 冬実

はじめに

四世紀半ばに鮮卑の拓跋部によってたてられ、中国史上初めて華北を統一した異民族政権である北魏については、従来様々な視点にたった研究がおこなわれてきた。その中でも、特に北魏史の性格を決定づけるのが部族支配の問題である。彼らは何とも遊牧民族であり、伝統的な部族組織を有していた。それが中国王朝を建設するとき、はたしてどのように対処され、変化していったのか。また、彼らは他の遊牧部族を支配する際にどのようにしたのか。これらは、北魏を中国史上どのように位置づけるのかという問いと大きく関連しているのである。

従来の研究では、彼らは初期の段階で部族組織を破壊し、漢化する

方向へむかったのだといわれている。というのは、本来部族制と、中国王朝として強力な中央集権体制を保ち、広大な華北を支配することとは矛盾するとの基本的な考え方があるからである。さて、彼らの社会形態の変化の上で、契機となる事件の最も重要なものは、初代皇帝道武帝が行った部族解散政策である。これは、これまでは、北魏が中央集権国家として発展するために、北族の部族組織を解体し、彼らを定住、農耕化させた政策として解釈されてきた。そしてこの政策こそが、北魏が他の五胡の国家と違う点であり、遊牧民族である拓跋部が部族制をのりこえて中国王朝を建設できた理由なのだ⁽¹⁾と位置づけられてきたのである。

しかしながら、部族解散を伝える三つの記事を再検討してみると、この政策が、遊牧民の定住農耕化を指すとは考えにくい⁽²⁾。それでは、一体彼らの部族組織はどのように支配を受けていったのだろうか。この点を考える上で問題となってくるのが「領民酋長」である。

北朝期の史料には、「領民酋長」なる語が散見される。従来、この領民酋長とは、部族解散政策が及ばなかった遊牧民に対して、北魏が与えた称号だと考えられてきた。しかし、部族解散を「部族組織の破壊」としてとらえられない以上、この領民酋長の問題は、改めて考え直してみなければならぬ。

一 史料に見える領民酋長の時期の問題

従来の領民酋長制の解釈をまとめてみると、次の二点になるといってもよい。一つは、北魏の初めから、北齊、北周にかけて、遊牧民のリーダーに与えられた号であるということ。特に、北魏は部族解散を行い、諸北族の部族組織を解体したが、解体しきれなかった北族の特別行政区を設け、その長に領民酋長を与えたというのである。もう一つは、この号は親から子へ受け継がれる、すなわち世襲制であることである。

破六韓常、附化人、匈奴单于之裔也。世領部落、其父孔雀、世襲酋長。時宗人拔陵為乱、以孔雀為大都督、司徒、平南王。孔雀率部下万人降於余朱榮、詔加平北將軍、第一領民酋長、卒。

（『北齊書』卷二七、破六韓常伝）

これは、魏末に領民酋長に就任している例であるが、まず「世よ酋長を襲う」とあり、そして「第一領民酋長を加う」とある。このような史料から、これまででは、北魏の初めから部族の長が世襲していた、と考えられていたわけである。

しかし、この二点にはそれぞれ大きな問題が見受けられる。まず一つめの点について考えてみたい。『魏書』『北齊書』『周書』から、領民酋長となった人物をとりだして再検討してみると、次のような特徴がうかがえる。（表一）これは、現在確認できる領民酋長の就任者を抽出したものである。これを見ると、北魏の初めの段階で領民酋長となっているのは、余朱氏という一族と、その姻戚である叱列氏など若干でしかない。特に問題となるのは余朱氏である。

余朱榮：北秀容人也。其先居於余朱川、因為氏焉。常領部落、世為酋帥。高祖羽健、登國初為領民酋長、率契胡武士千七百人從駕平晉陽、定中山。論功拜散騎常侍。以居秀容川。詔割方三百里封之、長為世業。……

羽健、世祖時卒。曾祖鬱德、祖代勤、繼為領民酋長。代勤、世祖敬哀皇后之舅。以外親兼數征伐有功、給復百年、除立儀將軍。

父新興、太和中、繼為領民酋長。家世豪擅、財貨豐贏。……及遷洛、特聽冬朝京師、夏掃部落。每入朝、諸公王朝貴、競以珍翫遺之、新興亦報以名馬。位散騎常侍、平北將軍、秀容第一領民酋長。新興每春秋二時、恒與妻子閱蓄牧於川沢、射獵自娛。（『魏書』卷七四、余朱榮伝）

余朱氏は、もともと強大な一族であり、北魏の中でも特別な扱いを受けていた。この一族に関しては、魏初から代々領民酋長であったことが『魏書』の記事によって確認される。しかし、残りの大半の領民酋長は、時期的には魏末、特に六鎮の乱以降に拝せられたものなのである。

さらに興味深いことに、領民酋長とは、北魏に多く出た官職であるにも関わらず、『魏書』にわずか二、三例しか記事がなく、多くは『北齊書』や『周書』の記事である。そして、彼ら大半の領民酋長の記事に、「代々酋長だった」とあるのだが、それではその先祖の記事が、『魏書』にあるかといえば、そうではない。すなわち、魏の初めから代々領民酋長だったかどうかはかなり疑わしいといえ

る。しかも、これを与えたのは六鎮の乱を鎮定し、北魏の実権を握った余朱栄であった。

前掲史料に見えるように、部族の長破六韓孔雀は、部下一万人を率いて余朱栄に降り、領民酋長を受けている。このように、余朱栄は勢力拡大のために、自分に下った北族に領民酋長を乱発しているというわけである。以上を見ると、領民酋長は、部族解散（北族組織の破壊）の事後処理のために魏初から恒常的に置かれたものではなく、多くは魏末に余朱栄によって諸北族に与えられたものとして史料に現れることになったと解釈するのが穩当であろう。

二 領民酋長と世襲制

次に二つ目の点について考えてみたい。領民酋長は魏初から世襲であったということであるが、実はこれは非常に大きな矛盾を抱えている。というのは、元來、鮮卑の部族制においては、部族のリーダーは、部民によってそのつど推戴されることを原則としているからである。部族のリーダーを普通「大人」という。その他、「君長」、「酋長」、「酋帥」などと呼ぶ場合もある。これらは、たとえ子供が継いでも彼に能力がなければ、部民は離散、共同体は崩壊するのが常であった。『後漢書』や『三国志』の鮮卑伝には、その状況が伝えられている。

有勇健能決訴訟者、推為大人、無世業相繼。…桓帝時、鮮卑

檀石槐者、…乃施法禁、平曲直、無敢犯者、衆推以為大人。

（『後漢書』卷九〇、烏桓鮮卑伝）

軻比能本小種鮮卑、以勇健、斷法平端、不貪財物、衆推為大人。

（『三国志』卷三〇、鮮卑伝）

このような推戴によるリーダーの樹立という形態が、鮮卑社会でいつまで続いていたのかどうかはうかがい知ることができない。しかし、拓跋部が北魏を建国する以前の歴史を記した『魏書』卷一、序紀の記述をまともてみると、少なくとも北魏の建国の段階では、このような状態は変化がなかったと考えられる。従来、ここに載せられている皇帝は、拓跋氏の一族であり、そのリーダーとしての地位はあたかも世襲されているように見られていた。しかし、記述をよくみると、たとえば神元皇帝、烈帝、太祖などはみな推戴されたリーダーだが、文帝、章帝、惠帝、煬帝の時は、国衆は離散しており、彼らはリーダーではなかったことがうかがえる。当時の状況は『後漢書』等の世界と変わらないのである。

このように、大人は基本的にそのつど部民によって推立されるものとなると、領民酋長の定義が問題となってくる。部族のリーダーに与えられる号でありながら、親から長子へ世襲されるということとは、鮮卑の部族組織からすると矛盾することにならないだろうか。

ここで考えたいのが、この領民酋長が余朱栄によって諸北族に与えられたものではないかということである。彼は、自分のもとに帰属し、勲功をたてた北族のリーダーに、將軍号、刺史、封爵とさら

に領民酋長を与えた。北魏ではこれまでは勲功ある部族の長に將軍号、刺史、封爵しか与えていない。領民酋長は彼のいわばオリジナルの褒賞であるかと思われる。そしてこの場合領民酋長は爵制的なものである可能性が強い。

(斛律) 金兄平、…及婦余朱栄、待之甚厚、以平襲父爵第一領民酋長。(『北齊書』卷一七、斛律金伝)

これは、斛律金と斛律平の兄弟がいて、兄の平が父の爵を継いで領民酋長となっている例である。このように、魏末に余朱栄によって与えられた領民酋長は、その後厳格に親から長子へと受け継がれていることが、史料上明確に確認できるのである。

おわりに

これらの特徴を総合的に考えると、以下の結論に達する。すなわち、領民酋長がはじめて実体化し、制度化したのは、魏末に余朱栄が爵位としてはじめた領民酋長だったと考えられる。北魏の初めから領民酋長がずっとあり、多くの北族が代々長子へと受け継がせていたとはやはり考えにくい。それでは、「世よ酋長を襲う」とあった場合どのように解釈すべきであろうか。それは、酋長を出す家柄であったとするのが妥当であろう。この場合の酋長は、爵としての領民酋長をさしているのではなく、厳格に親から子へと世襲されるものではなかった。世襲となったのは、やはり魏末からだと思われる。

る。

さて、この結果、本来リーダーが推戴されるはずの部族制に、世襲の爵制がもちこまれたことになる。この矛盾が、部族組織を変化させ、解体させていったのではないだろうか。この後、北齊、北周にかけて、領民酋長制はますます制度化されていったが、それによって部族のリーダーが世襲化し、部族組織が解体していったものと思われる。このように見えてくると北魏の部族組織は、従来いわれているように、国初の部族解散によって破壊されたのではなく、特に辺境地域では、後の段階までかなり残されており、むしろそれが魏末の混乱時に、彼らの社会に世襲の爵制がもちこまれたことによって変化し、北齊、北周にかけて促進され、それがやがて漢化した胡人と漢人による胡漢政権ともいうべき隋唐へとつながったのではないだろうか。⁽⁴⁾

注

- (1) 谷川道雄『隋唐帝国形成史論』(筑摩書房、一九七一年)
- (2) 定住農耕化を否定する意見も若干は提出されているが、それにかわる新しい解釈はまだあらわされていない。
- (3) 佐久間吉也「北朝の領民酋長制について」(『福島大学学芸学部論集』第一輯、一九五〇年)周一良「領民酋長与六州都督」(『魏晉南北朝論集』中華書局、一九六三年)。
- (4) 『隋書』卷一七、百官志。(本学大学院前期課程在籍)

